

+

2022年

## 3月第1・2週の主日礼拝説教要約

・3月 6日：マタイ福音書 4：1-13.

「 荒れ野の日々に 」

・3月13日：マタイ福音書 25：1-13.

「 油断は禁物 」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

## 説教 《 荒れ野の日々に 》

彼らは与えられた(犠牲の)雄牛を引いて来て整え、朝から昼まで「バアルよ、私たちに答えてください」と言ってバアルの名を呼んだ。しかし、何の声もなく、答える者はいなかった。(聖書協会共同訳 列王上18:26)

旧約聖書のこの箇所は、預言者エリアが単独で大勢のバアルの預言者と対決をしている場面です。先ずは、エリアではなくバアルの預言者達が先手を打って、彼らが備えた焼き尽くす献げ物(雄牛)に天からの着火を希求しますが、全く反応がありません。

次はエリアの番です。彼は手際よく祭壇を修復すると、そこに薪を敷き、裂かれた雄牛を載せ、水を三回注ぎ、集まった民衆に真の神の存在を知らせるために、「主よ、お答えください」と祈りました。すると、天からの火が雄牛を焼き付くし、その後、飢饉を終わらせる雨が降りました。

代表的な異教の神のバアルを信じていた民衆は、その神自体が存在しないことを知ると、怒りのあまり急襲し、バアルの預言者たちを討ち滅ぼしてしまいます。

聖書は、天地の造りまで全能の父なる神が唯一の神であることを教えています。しかし、困ったことに、悪魔(希:ディアボロス)の存在は否定しません。元々、ヘブライ語では「サタン」ですが、ヨブ記でも堂々と神のパートナーとして登場し、義人ヨブを試み、不幸な目に遭わせます。

サタンは、神の独り子の宣教の開始にあたり、再び、何処からともなく現われて、イエスを試みます。その力量からして、相手(イエス)を不幸に陥れることは断念したようです。ただ、人の子としてこの世に生まれた神の子には弱点を見出だせると信じて、付け込もうと、時を超えて、再び介入してきたのです。勿論サタンの試みは、いとも容易く撥ね除けられました。真の神の目的はサタンの知るところではなかったのです。

一方、人間が、サタンの誘惑を撥ね除けることは容易ではありません。地上のあらゆる技量を駆使して、世界を支配しようと試みます。幾度となく陥った人類の過ちは今、再び頭を擡げています。第三次世界大戦へと突き進む日々を、今、私たちは送っています。

キリスト教徒ならば、荒れ野で40日間を過ごされた後、空腹を覚えられた主イエスが荒れ野の日々に、けっしてサタンの誘惑に陥ることがなかったことを忘れてはなりません。キリスト教会は、この世の権力者

を教導してでも、神の子が自らキリスト者の模範を示されたことの深い意味を、悟らせる義務を負っています。たとえ、戦争当事者が、知らず知らずのうちに、サタンと取引をしているさ中であったとしても。

### 説教 《油断は禁物》

入ったものは、すべての肉なるものの雄と雌であった。神がノアに命じられたとおりであった。そこで主は、その(方舟の)後の戸を閉じられた。(聖書協会共同訳 創世記 7章16節)

二度とこの世界を大洪水で水没させることはしない、と後悔された神は、被造物に対しては別の手段を用いることを示唆します。

受難週のおそらくは三日目の水曜日の夜にイエスが語った譬え話の中で、マタイ福音書にのみ記されている記事の一つが「十人の乙女」の話です。

誰も知らないその機会が、ノアの大洪水の如く突然おとずれる時の備えは、各人の日常生活の中にありそうです。「燈し火と油の備蓄」、この両方がいつでも手元にあり、さらに持ち出しが可能な状態であることが問われているのです。

一見、何の落ち度もない十人の乙女がいます。本来なら、難なく社会から受け入れられる遜色のない人々です。ところがそれが神の国の話となると、この世とは別のことが発生するのです。その中の五人は受け入れられ、他の五人はとり残される運命にあります。「燈し火と油の備蓄」の問題で。大洪水のような自然災害ならば、懐中電灯やラジオがなければ避難行動はとれません。日常的に患えなき備えを要します。ただ「燈し火と油」の話となると、少々勝手が違うようです。乙女らには災難が降り掛かるのではなく突然の「招待」が到来するのです。聖書では神を花婿に、人間を花嫁に譬えます。したがって、一喜一憂する人間らの性の区別はありません。さらに、乙女に譬えられる人間とは、神の前に非力な存在であるばかりではなく、花嫁以前の(神の裁きの前には)未決のままの存在であることを意味しています。一見、清廉潔白のように見える者も、そうでない者も、最終的にではなく段階的に(花嫁、乃至はそれ以前の乙女として)、造り主である神に相対しているのです。

彼らの所持する燈火は光です。消さずに闇を照らし続けることが求められます。乙女(=人間)らが、それぞれの人生を生きる時に、世の光となることが求められているのです。また、それが神の御心である限り光は消されることはありません。主の山にも備え(雄羊)が、さらに主の燈火にも備え(=油)が欠乏することはないのです。カナの婚宴の葡萄酒と同じです。また、この油はお金では調達できません。その時が、真夜中であらうとなかろうと。最後に、この世の取り引きでは得られないこの油は、その人が何時でも輝きを放つための備えであり、また、そのために不可欠の油、神の下に、御旨に適って、絶えることなく備蓄されていた貴重な油だったのです。

この時、油が足りて光を保ち、婚礼の宴に間に合い、扉の中へと招き入れられたのは、十人の乙女のうちの五人にとどまったのでした。